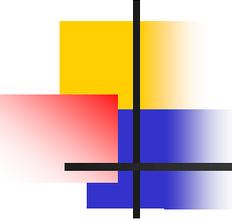


教育実践を理解するための
バフチン・ダイアローグ論：
豊かな異文化交流の実現

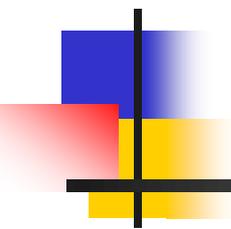
田島充士
(東京外国語大学)

言語文化教育研究会特別企画
発表資料
(2018.1.20.)



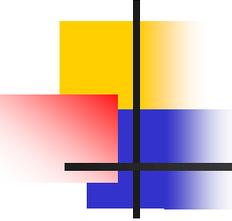
本発表の趣旨

- バフチン論は、「**ダイアローグ**」概念を扱った思想としては、もっとも有名なものの一つだろう。
- 本発表では、バフチンのいう「ダイアローグ」が、広い意味での異文化交流を志向するものであることを示す。
- さらに私自身が行っている大学教育の実践事例を視点に、この「ダイアローグ」概念の、教育実践研究への適用可能性について考察する。
- 2018年春に出版予定の『バフチン・ダイアローグ論を実践的に読み解く(仮題)』(福村出版)およびTajima(2017)の成果をもとに発展的に作成した。



バフチンの視点から捉える「文化」: ヤクビンスキー論の影響

第一章



バフチンの議論の前提

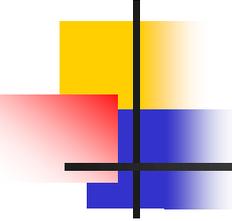
- バフチンは、空間的に共有することがない、唯一でかけがえのない自己の視点から世界の意味を解釈する、という前提から議論を開始する(Clark & Holquist, 1984)。



- わたしの外にあって向かい合っている人物の全体をわたしが観察するばあいに、実際に体験されるわたしと彼の具体的な視野は一致しない。・・・わたしたちが互いに向き合うとき、わたしたちの瞳には二つの異なる世界が映っている。(バフチン, 1999, p.145)



- この自己視点(「**人格**」とも呼ばれる)の唯一性を「**視覚の余剰**」と呼ぶ。



バフチン論における「文化」の定義

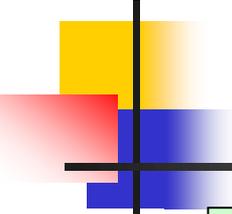
- 特定の「イデオロギー(=世界観)」を共有する「文化」という集団の实在性は前提化できない。



- 同じイデオロギーを背景にすると「想定」される話者同士の交流か。
- 異なるイデオロギーを背景にすると「想定」される話者同士の交流か。



- 文化(「社会的言語」を共有するなど)という「集団の斉一性」は、実際に展開される「交流の実態」と、交流に携わる人びとの「自己意識」の様相により見出され得る、パフォーマンスといえる。



「文化集団」になっていくパフォーマンス (家島, 2011)

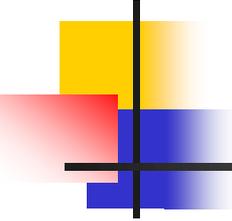
A: えーと、女の人と男の人がいて

B: クリスチーナと

A: さすが(笑)意外とご存知で。っていうような話
で、「なぜ戦うのか？」っていうことを言うシーン
があって……えっとマニアックな話になって申し
訳ない

B: あー、見ているからオッケーです

A: あ、オッケーですか(笑) シュラク隊のマスドライ
バーのルールが、っていうときに



バフチン論におけるヤクビンスキー論

- 1923年に出版された『ダイアローグの言葉について』(ヤクビンスキー, 印刷中)は, 当時のソ連言語学界において著名な論文だった。
- バフチン・サークルメンバーの一人であるヴォロシノフは, ヤクビンスキーが大学での指導教員だったこともあり, 彼の名義で書かれた論文 (『マルクス主義と言語哲学』(バフチン, 1989)『生活の言葉と詩の言葉』(バフチン, 1979)など)には, その影響が色濃く読み取られる。
- 本章では, バフチン(ヴォロシノフ)論に引き継がれているヤクビンスキー論の視点からの議論をまとめる。

「自動化」と「異化」

(ロシア・フォルマリズムにおける議論)

- 交流に際して使用する言語の内実について深く考えずに、自動的に意志交換が可能な認識・意識。

= 「自動化」(ヤクビンスキー, 印刷中)

+

- 交流に際して使用する言語の内実について多面的に考え、慎重に意志交換を行う認識・意識。

= 「異化」(シクロフスキー, 1988)

↓

- 自動的な自己意識を伴う交流を通し、互いが背景とする「文化」の斉一性が個々の話者らによって確認される。

or

- 異化的な自己意識をともなう交流を通し、「文化」の異質さが確認される。

交流のダイアログ形式

(田島, 印刷中; ヤクビンスキー, 印刷中)

- 同じ空間に居て, 互いのことを直接的に認識でき(顔の表情・ジェスチャー等), また同じ対象を眺めることができる話者。(短期的に処理される「統覚量(空間的リソース)」)

+

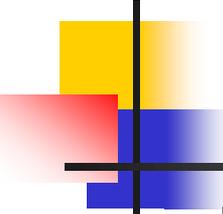
- 交流テーマに関する知識を共有していることが, 互いに期待できる話者。(長期的に処理される「統覚量(知識的リソース)」)

↓

- 各リソースの共有の「期待」が高まると, 言語認識の自動化が進み, 表出される言語構成が単純化する。互いが, 同じ世界観を共有する「文化」集団に在ることを, パフォーマンスしあうようになる。(=「社会的方言」)

↓

- 交流の「ダイアログ形式」



「あ・うん」の呼吸で通じる「仲間集団」というパフォーマンス(ヤクビンスキー, 印刷中)

「一人の若者は、きっぱりと勢いのいい調子でこの名詞を発音して、前に一同が話していたなものかに対する、思いきり侮辱のこもった否定を表明した。すると、もう一人はその答えに、まったく同じ言葉をくり返したが、今度はもうまるで別な調子で、別な意味を持たせていた…こういう次第で、ほかの言葉は一つも口に出さないで、彼らは後から後からと、前後六回続けざまに、このお気に入りの言葉ばかりくり返したのだが、それでもお互いに遺憾なく理解し合った。」
(ドストエフスキー, 1970, pp.132-133)

交流のモノローグ形式

(田島, 印刷中; ヤクビンスキー, 印刷中)

- 異なる空間に居て, 互いのことを間接的にしか認識できず, また同じ対象を眺めることができない話者。

+

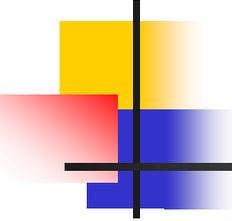
- 交流テーマに関する知識を共有していることが, 互いに期待できない話者。

↓

- 言語認識の自動化は促進されず, 話者が伝えようとする意志のすべてを言語で表現しなければならない。結果として, 表出される発話の言語構成は複雑化する。

↓

- コミュニケーションの「**モノローグ形式**」。典型的には, 論文などの書きことばや不特定多数を相手にしゃべる講演会の講演者のことば。異文化交流の基本形。



モノローグ形式の発話例

- 「あの机」「この本」では通じない。

↓

- 「〇〇大学の××先生の研究室にある一番大きな机」「△△先生の□□という授業で指定された※※についての本」など、必要な情報をすべて、表現しなければならない。

知識を共有

② 間接的ダイアログ形式

事例：
親しい友達や家族とのソーシャルメディアを介した交流

① 直接的ダイアログ形式

事例：
親しい友達や家族との直接的な交流

空間を未共有

空間を共有

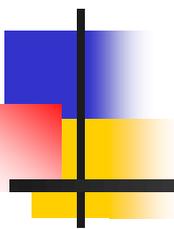
④ 間接的モノログ形式

事例：
不特定多数の読者に向かって論文を書く交流

③ 直接的モノログ形式

事例：
教師が新たな知識を生徒に教える交流

知識を未共有



バフチンの視点から捉える「文化」: バフチン自身の論点

第二章

ことばの「情動的側面・評価的側面」

(Eagleton(1983)を参考に)

- 一方, ことばには情報だけではなく, 評価も含まれる。



- **ことばの「情動的側面」**

「この聖堂は1612年に建てられたバロック建築の建物である」

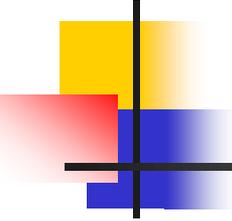
- **ことばの「評価的側面」**

「この聖堂は, 壮大なる建物である」

「この聖堂は, 金持ち好みの派手な装飾で嫌い」



- ヤクビンスキーの主要な議論は, 「情動的側面におけるギャップを埋めてやれば, 聞き手は話し手の発話を肯定的に評価し受け入れる」ことが前提になっている。



評価（価値判断）の肯定・否定

- バフチンは、自身の名義で出した著作では、言表に対する話者の評価的側面を重視する傾向がみられる。



- 話し手の発話に対し、聞き手が肯定的な評価をともなう応答（是認：相手の見解の受け入れ）を行う。

or

- 話し手の発話に対し、聞き手が否定的な評価をともなう応答（否認・批判：相手の見解の拒絶）を行う。



- ヤクビンスキーが重視した空間的・知識的リソースの共有とは関わりなく、聞き手の肯定的評価の予測は、話し手の「自動化」を促進し、否定的な評価の予測は、「異化」を促進する。

否定的な評価をとまなうダイアログ形式 (暗黙の共通知識に対する否認で構成される発話)

男：……もう、別れないか

女：……え？別れるって？

男：……俺たちもうダメだろう

女：はあ？？、勝手に決めないでよ！！

男：……もうずいぶんと前から考えていたんだ

女：……何が悪かったの??

男：……たがいの相性が悪かったんだよ、きっと

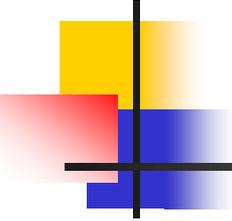
女：……勝手にだね

モノローグ形式の発話にみられる聞き手の否定的評価(バフチン, 1995)

- 受取人の否定的評価(非難・批判・哀れみなど)を先取りして応答する書簡(「**内的ダイアローグ**」)の例。



- 「小生は台所に住んでいます・・・(お断りしておきますが、私たちのところの台所は清潔で、明るく、非常に快適です)。・・・夢々お考えになっちゃいけませんよ、そこに何か特別な事情が・・・隠されているなんて。だって、台所でしょ!・・・なんて思われるかもしれませんが、そんなことはどうでもいいんです。・・・小生がこうしているのはすべて便利さのためなんですから、どうか何か別の理由でこうしているなんてお考えにならないで下さいね。」(『貧しい人々』より)



背景とする文化の異質さの感知

- 聞き手が背景とする「異文化」の感知は、以下の二契機による。



- リソース(統覚量)の共有の有無
- 評価の肯定性/否定性



- やりとりの中で、聞き手とのリソースの共有が期待できず、また自らの発話に対する評価が否定的であると話し手が判断すると、相手が背景とする文化の異質さが検知される。



- 話し手の意識の異化が高まり、想像上の他者と語りあう内的ダイアローグが活発化する。

否定的評価

説得力のある
モノログ形式

事例：
聞き手の内的文脈に
応答しようとする
説明的交流

緊迫する
ダイアログ形式

事例：
知人と繊細なテーマ
について話し合う
交流

リソースを未共有

リソースを共有

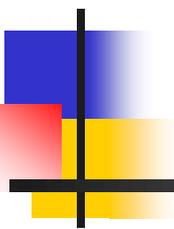
権威的な
モノログ形式

事例：
聞き手の内的文脈を
考慮に入れず行う
説明的交流

自動化された
ダイアログ形式

事例：
知人と日常的テーマ
について話し合う
交流

肯定的評価



異文化交流としてのダイアローグ

第三章

交流に対するバフチンの価値づけ

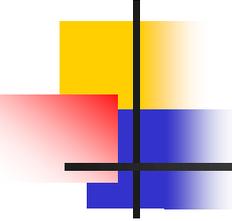
- バフチンは話者が、複数の言語集団に自動的に参加する交流には、明らかに重きを置いていない。



- 文盲の農民は、ある言語(教会スラヴ語)で神に祈り、別の言語で歌い、家庭では、第三の言語を話した。しかし、これらの言語は農民の言語意識において対話的に相関してはいなかった。…彼はまだある言語を…他の言語の眼で見ること(つまり日常生活の言語と生活世界を、祈祷あるいは歌の言語で見ること…)ができなかった。(バフチン, 1996, p.71)



- 参加する言語集団の世界観を自らの意識において相関できる個々の話者の「異化」をともなう(異言語)交流状況を評価。 →「ラズノレーチエ(ヘテログロシヤ)」



バフチンのいう「ダイアログ」

- バフチンのいう「ダイアログ」(そして「モノログ」)は, 彼独自の意味付けが与えられた概念(Morson, 1981)。



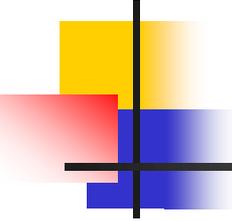
- ダイアログとは, 話し手の発話が聞き手の応答可能性に対して開かれているとする話者らの判断に基づく交流。
- モノログはその逆に, 応答可能性を軽視する判断に基づく交流。



- バフチンのいうダイアログとは, 異質なリソースを持ち, 否定的な評価を下す他者の応答に開かれた, 自分たちの既存の意識の異化をもたらす交流。端的に言えば, 異文化交流を志向するものといえる。



- 「ポリフォニー・ダイアログ」(田島, 2014)

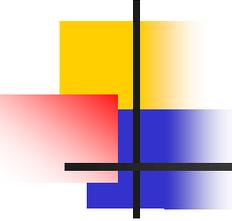


否定的な評価に向かう異文化交流

- ラズノレーチエ(異化をともなう異言語・文化交流状況)をもたらす契機として、相手の言表を批判的に解釈し、別様の解釈可能性を迫る異質な「他者」の存在が、高く価値付けられている。



- 他者のロールモデルとしての「悪漢・道化・愚者」(バフチン, 1996, pp.260-262)



「悪漢・道化・愚者」

- 「悪漢・道化・愚者」は、慣習的な世界の外に住み、その視点から慣習に潜む虚偽的側面を批判的に描く役割の総称。(＝否定的評価を下す他者)
- ↓
- 犯罪者・はぐれ者だけではなく、隠蔽された犯罪を暴く「探偵(警察官)」や、慣習の中で化石化したイデオロギーの意味を多面化する「哲学者(ソクラテス)」も含む。
- ↓
- 自動化された因習的イデオロギーの問題を暴く「賢明な無知」(バフチン, 2001)を発揮する「賢明な愚者(wise fool)」とまとめる。

ヴォルテール『ミクロメガス』

(バフチン, 1995, p.298)

学者: 霊魂とは一個のエンテレケイアであり、かつ一個の理性である。この理性に依り、霊魂はその存在に要する力を所有する…。

ミクロ: 私はギリシャ語はあまり解らないんだけど。

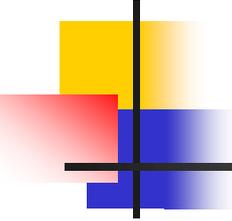
学者: ワシだって同じですじゃ。

ミクロ: え? では何故あなたはアリストテレスとやらをギリシャ語で引用したんです。

学者: それはですな、自分でも全然解らんことは、いちばん理解しにくい外国語で引用するに限るからですじゃ。



- 学者たちの権威性を認めない異星人(賢明な愚者)とのやりとりの中で、学者たちのイデオロギーの虚偽性が「異化」される。



陽気な相対性(アンビバレンス)

- 愚者は自らのイデオロギーの優位性を相手に押しつけるために、相手のイデオロギーに対する否定的評価を下すのではない。
↓
- 相手を攻撃する「プロパガンダ」ではないし、自分のイデオロギーを「正解」として押しつける「教師」でもない。

■ 愚者は他者のことばを批判するが、自らのことばも否定する。異質なイデオロギーの衝突による、互いのイデオロギーの改新が目的。「根無し草」。
↓
- 「アンビバレント(両面価値的)」を楽しむ「陽気な相対性」。

陽気な愚者（非教師）としてのソクラテス （結論は新たな対話のスタートに過ぎない）

ソクラテス: そうすると、すぐれた人物たちは生まれつきによってすぐれているのではない以上、はたして学ぶことによってなのだろうか？

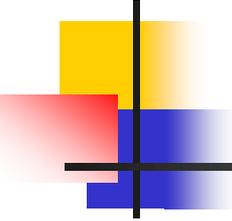
メノン: その帰結はもう動かないように思えます。...

ソクラテス: ゼウスに誓って、たぶんね。—しかしひょっとして、われわれがそのことに同意したのは正しくなかったのではあるまいか。

メノン: でもたったいま、たしかに正しい所論と思われたのですよ。

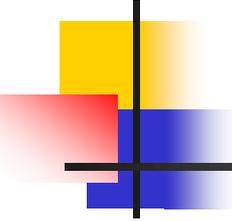
ソクラテス: いや、少しでもそれにたしかなところがあるべきだとするなら、たったいまそう思われたというだけでなく、いまこの現在においても、将来においても、やはり正しい所論と思われるのでなければならぬだろう。

メノン: どうしたのですか、いったい。何のつもりであなたはこの結論に難色を示し、徳が知識であるということを疑うのですか？
(プラトン, 1994, pp.80-81)



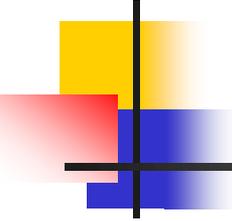
アンビバレントな異化としての「笑い」

- 他者(悪漢・道化・愚者)に自分のイデオロギーを否定され、新たな解釈を拒絶し、「怒り」を示すパターンは多いだろう。
 - 一方、他者による新たな解釈可能性に驚き楽しむパターンもありえるだろう。
- ↓
- 「アンビバレントな異化」としての「笑い」(バフチン, 1995)
 - 笑いとは、慣習化された世界観に基づく期待が裏切られ、思ってもみなかったような状況が展開する際に発生する行動(Morreall, 1983, pp.38-59, pp.101-108)。



学問＝悪漢達の陽気なカーニバル

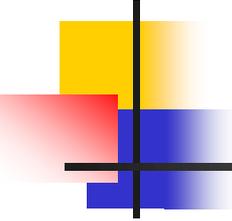
- ラズレーチェの状況は、中世(12世紀以降)・ヨーロッパにおける「学問」の成立をイメージさせる。
↓
- 既存の宗教や権力者のイデオロギーを否定的に捉え、各地を放浪する「ゴリアルディ(悪漢の代表選手)」が、自発的に集まって議論を交わしたのが「ユニヴァーシティ(学生組合)」の始まり(ルゴフ, 1977; Haskins, 1957)。
↓
- 学問は本来、既存のイデオロギーを批判し、異質なイデオロギーを衝突・異化させる、アンビバレントな相対性を楽しむ異文化交流実践だった。
→「カーニバル」(バフチン, 1995)としての学問



差異は消滅しないが もはや深刻なものではない

- 陽気な相対性がもたらされるからといって、各人のイデオロギーの差異が解消されるわけではない。
- しかし、こういったカーニバル的ダイアローグを体験することで、自分自身の文化・価値観にしがみつくことなく、様々な立場からの解釈可能性を楽しめる(=笑える)ようになる。

- 陽気で相対的だからといって、当のその時代の見地、同時代の間近な見地から見た、正当と不正、進歩と反動の差異が解消されるわけではない。とはいえ、これらの差異は絶対的なものではなく、偏頗で視野の狭い人々が考えるほど深刻な差異ではなくなる(バフチン, 2007, p.584)。



「信頼」という契機

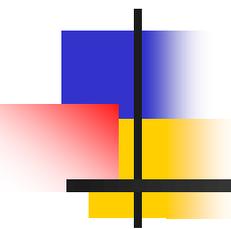
- カーニバルにおいて、異化をともなう交流が生産的なものとなるためには、他者の存在価値を認め、彼らと共にあり続け得たいと願う心性が必要。



- 他者に対する「**信頼**」

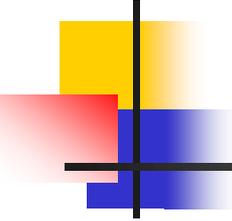


- 笑いの真実への信頼は無意識的なものだった。笑いの裏にはけっして強制は隠されていないこと、笑いは火刑台を築きはしないこと、…笑いは未来、新しきもの、来るべきものと結びついて、未来への道を切り開くことなどを人々は理解していた。(バフチン, 2007, p.125)



教育実践への適用

第四章



ポリフォニー・ダイアローグの特性

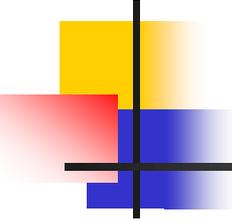
- 異質な他者との交流を可能とする授業実践に置いて意識すべき、ポリフォニー・ダイアローグの特性をまとめる。



- 聞き手の空間的・知識的リソース(「**情報的側面**」)の内実を考慮に入れた言語構成ができる。
- 聞き手の(否定的)評価(「**評価的側面**」)を考慮に入れた発話内容を検討できる。
- 聞き手の視点の独自性を尊重し、相手との交流を楽しむ「**信頼感**」が構築できる。



- 以上の話者特性をのばし、豊かな異文化交流(=アンビバレントな異化)を創出する場として授業実践を行う。



「教室」という空間の問題(田島, 2013)

- 学生にとって, クラスメートや教員は, 本来, 経験・知識の共有が期待される存在。

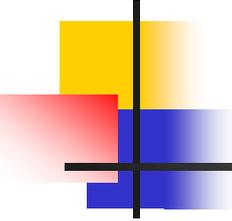
+

- 異質な評価を下す他者との出会いを回避しようとする現代青年独自の課題(藤井, 2009; 溝上, 2014)。

- 自分たちの学習成果を相手に伝える意義を感じることは不自然な行為であり, また異質な評価を相手に下すことも困難。

↓

- 授業で学んだ内容は自動化され, 教室の中でだけ通用する「社会的方言」にとどまる可能性が高まる。



私の大学における実践事例

(Tajima, in printing)

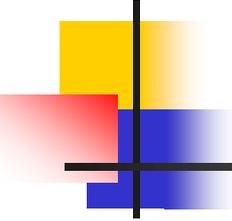
- 教室内の人間関係を、互いにとって「賢明な愚者（異なる活動文脈を背景とし、また否定的評価を下す他者）」に見立てる。この他者性の「リアルさ」を演出することで、アンビバレントな異化をともなうダイアローグに仕立ててみたい。



- 学習内容について異質な関心を持つが同じ問題についてディスカッションする場面を設定。

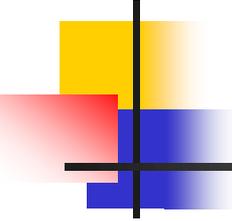


- 異質な他者との異文化交流のパフォーマンス。



介入ワーク(2014年～)

- 生徒指導に関する講義を対象とした(履修者約100名)。
↓
- 保健室の個別対応等を通し「安全基地」を確保することが、不登校生徒支援において重要と講義で教示。
↓
- その後、不登校児童A君の対応をめぐり「保健室が甘やかすから、A君は教室に戻れない」とする担任の評価を紹介。
↓
- グループワークとして、「生徒指導担当として担任の先生に対応のあり方を説明する」課題を与えた。(介入前GW)
↓
- 志願者を募り、担任の立場を想定した情報・評価を考えさせ
(「賢明な愚者」役)、グループと対立的に話し合わせた。(介入後GW)



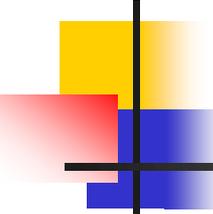
学生達の変化

- 介入前は、「心理学の知識を知らないから、こういう無理解な主張をするのだ」など、相手がもたらず情報・評価を切り捨てるような発言内容が多かった。
- ↓
- 介入後、授業内容を受け入れるだけではなく、担任役がもたらず情報・評価に合わせて、最善策を考える、との姿勢に変化した。

(授業コメント(一部改変))

「相手にも感情があり、立場がある。そのことを考えて、自分の主張を変えていくことが必要だと思った。」

「私の主張は『主観的だ』といわれた。しかしどの意見も『主観的』ではないか。だからこそ、対話が必要なのだ」



学生の演示例(モデル)

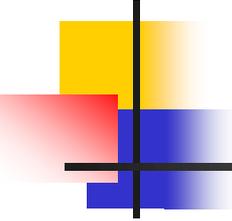
担:A君がずっと保健室に居続けたら、どうするのですか？

生:先生のご不安はごもっともですが、まだA君は、このままでは教室に戻れないとみています。まずは養護教諭と安全・安心な関係を築いていくことが大事だと思います。

担:じゃあ、教室には戻してくれるんですか？教室に戻していただけないと困るんです。

生:もちろん、少しずつ時間をかけて、A君を教室に戻していくよう働きかけるつもりです。我々で先生の教室を支援したいと思うのです。

担:一緒にA君を支援して下さるのですね。よかったです。どうぞよろしくお願いします。



実践総括

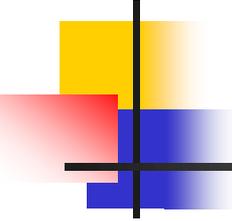
- 介入前のディスカッションでは、講義内容をくりかえし、「担任は心理学の知識を知らない」などと主張。（知識を相手に与えればよいという傾向）



- 介入後、異質な他者の視点から再解釈し、その応答を論理的に想定した交流が増加した。さらに、相手の否定的評価の背景にある文脈を考慮した、新たな論展開を工夫するようになった。



- 教材に対する、アンビバレントな異化（ポリフォニー・ダイアローグ）の傾向が増加した。



カーニバルを生み出す「信頼」

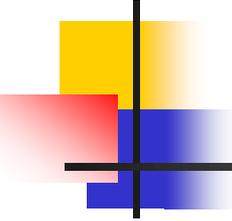
- このような否定的評価がうまく機能する背景として、学生自身が相手と「信頼感」を築くことの重要性を指摘したい。



- 真剣な意見が飛び交う中、おもわず感想を話したくなって話してしまったり、授業内で笑いあえることができたりするのは、教室内にそうさせる雰囲気があったからであろう。…。一人ひとりの生徒が間違いや批判を恐れずに発言しようという意欲がわく教室。

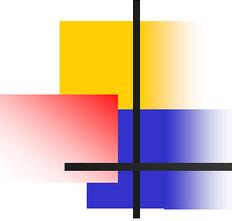


- 授業運営において、「友好的に批判を行い合うことが、互いが賢くなる上で利益が多いし楽しい」という陽気な相対性の雰囲気作りが重要。



教育実践研究に対する バフチン・ダイアローグ論の射程

- バフチン・ダイアローグ論の射程は、学生が仲間と「話し合う」という方向だけには向いていない。
- むしろ、共有情報のギャップ＋評価の否定性を抱える相手との交流を通じた、自己意識の複雑化(異化)の方向に向いている。しかも、それを通じた成長を喜ぶという契機が重要。
- 異文化を背景とする者とのアンビバレントな交流可能性を目指す諸実践の豊かさを検討することが、もっとも効果的な「使い方」といえるだろう。



さいごに

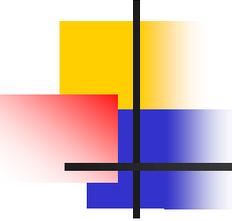
- バフチンはスターリン独裁政権時代，政治犯として国内追放された地方において，様々な実践に携わり，最後は教員養成大学の責任者を務めた。バフチンが中等学校の教員だった頃に書かれた論文が英語で読める(Bakhtin, 2004)。

↓

- 彼の議論が文学研究にとどまらず，社会学・教育学・心理学・異文化間交流研究などの多岐にわたる領域の専門家を魅了するのも，この他者と「生き残る」実践が基盤にあってこそと感じる。

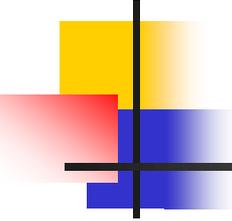
↓

- 異質な他者との出会いを言祝ぐバフチンの論は，豊かな差異を生きることが課せられる我々の時代の教育実践および学問の姿を検討する上で，有用なものだろう。



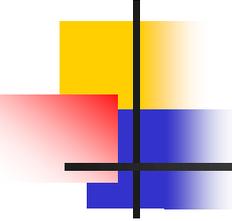
引用文献

- バフチン, M. M. 斎藤俊雄(訳) (1979). 生活の言葉と詩の言葉 磯谷孝・斎藤俊雄(訳) ミハイル・バフチン著作集①フロイト主義／生活の言葉と詩の言葉 新時代社 pp.213-262.
- バフチン, M. M. 桑野隆(訳) (1989). マルクス主義と言語哲学: 言語学における社会学的方法の基本的問題 未来社
- バフチン, M. M. 望月哲男・鈴木淳一(訳) (1995). ドストエフスキーの詩学 筑摩書房
- バフチン, M. M. 伊東一郎(訳) (1996). 小説の言葉 平凡社
- バフチン, M.M. 伊東一郎・佐々木寛(編訳) (1999). ミハイル・バフチン全著作・第1巻 水声社, pp.19-86.
- バフチン, M.M. 杉里直人(訳) (2001). 叙事詩と小説: 小説研究の方法論をめぐって 伊藤一郎・北岡誠司・佐々木寛・杉里直人・塚本善也(訳) ミハイル・バフチン全著作第五巻: 一九三〇年代以降の小説ジャンル論, pp.469-521.
- Bakhtin, M.M. Stone, L.R. (Trans.) (2004). Dialogic origin and dialogic pedagogy of grammar: Stylistics in teaching Russian language in secondary school. *Journal of Russian and East European Psychology*, 42, 12-49.



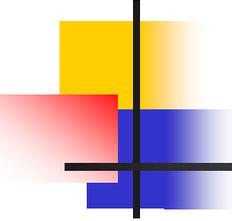
引用文献

- バフチン, M.M. 杉里直人(訳) (2007). フランソワ・ラブレールの作品と中世・ルネサンスの民衆文化 バフチン, M.M. 杉里直人(訳) ミハイル・バフチン 全著作第七巻:フランソワ・ラブレールの作品と中世・ルネサンスの民衆文化ほか 水声社, pp.11-pp.617.
- バフチン, M.M. 桑野隆(訳) (2013). ドストエフスキーの創作の問題 平凡社
- Brandist, C., & Lähteenmäki, M. (2010). Early Soviet linguistics and Mikhail Bakhtin's essays on the novel of the 1930s. In C. Brandist, & K. Chown(Eds.), *Politics and the theory of language in the USSR 1917-1938: The birth of sociological linguistics* London: Anthem Press. pp. 69-88.
- Clark, K., & Holquist, M. (1984). Mikhail Bakhtin. Cambridge: Harvard University Press. (クラーク, K., & ホルクウィスト, M. 川端香男里・鈴木晶(訳) (1990). ミハイル・バフチンの世界 せりか書房)
- ドストエフスキー, F.M. 米川正夫(訳) (1970). 作家の日記 河出書房新社
- Eagleton, T. (1983). *Literary theory: An introduction*. Basil Blackwell. (イーグルトン, T. 大橋洋一(訳)(1985). 文学とは何か:現代批評理論への招待 岩波書店)



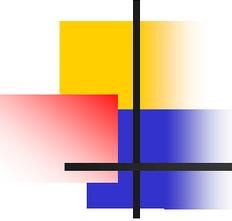
引用文献

- 藤井恭子 (2009). 友人関係の発達 宮下一博(監著) 松島公望・橋本広信(編著) ようこそ! 青年心理学: 若者たちは何処から来て何処へ行くのか ナカニシヤ出版, pp.54-64.
- Haskins, C.H. (1957). *The rise of universities*. Cornell University Press. (ハスキンス, C.H. 青木靖三・三浦常司(訳) (2009). 大学の起源 八坂書房)
- 家島明彦 (2010). インタビューにおける語りの顕在化と潜在化: 語り手と聴き手の関係性によって見えてくる/見えなくなるもの 質的心理学フォーラム, 2, 85-87.
- 桑野隆 (2002). 対話的能動性と創造的社会: バフチンの社会学 of 今日の意味 (バフチン再考) 思想, 940, 5-24.
- ルゴフ, J. 柏木英彦・三上朝造(訳) (1977). 中世の知識人: アベラールからエラスムスへ 岩波新書
- 溝上慎一 (2013). 自己-他者の構図から見た越境の説明: 社会的な他者性を統合して発展する 富田英司・田島充士(編著) 大学教育: 越境の説明力をはぐくむ心理学 ナカニシヤ出版, pp.221-230.
- Morreall, J. (1983). *Taking laughter seriously*. State University of New York Press. (モリオール, J. 森下伸也(訳) ユーモア社会をもとめて: 笑いの人間学 新曜社)
- Morson, G.S. (1981). Dialogue, monologue, and the social: A reply to Ken Hirschkop. G.S. Morson (Ed.). *Bakhtin: Essays and dialogues on his work*. The University of Chicago Press, pp.81-90.
- プラトン 藤沢令夫(訳) (1994). メノン 岩波文庫



引用文献

- シクロフスキー, V.B. 松原明(訳) (1988). 手法としての芸術 桑野隆・大石雅彦(編) ロシア・アヴァンギャルド⑥フォルマリズム:詩的言語論 国書刊行会, pp.20-35.
- 田島充士 (2013). 異質さと共創するための大学教育:ヴィゴツキーの言語論から越境の意義を考える 京都大学高等教育研究, 19, 73-86.
- 田島充士 (2014). ヤクビンスキー・バフチン・ヴィゴツキーの論にみるモノローグ・ダイアログ概念の展開: 社会集団の斉一性と人格の独自性とをめぐって ヴィゴツキー学, 別巻3, 1-20.
- Tajima, A. (2017). A dialogic vaccine to bridge opposing cultural viewpoints based on Bakhtin's views on dialogue and estrangement. *Integrative Psychological and Behavioral Science*, 51, 1-13.
- Tajima, A. (in printing). Inculcating "meta-positions" that enhance understanding in conflictive worlds: A study based on Bakhtin's ideas about dialogic estrangement. In M. Puchalska-Wasył, P. Oleś, & H.J.M. Hermans (Eds.) *Dialogical Self: Inspirations, considerations, and research*. The Learned Society of the John Paul II Catholic University of Lublin.
- 田島充士 (印刷中). 『ダイアログのことばについて』解題 田島充士 (編) バフチン・ダイアログ論を実践的に読み解く 福村出版
- ヴォルテール 川口顕弘(訳) (1988). ミクロメガス:哲学的物語 川口顕弘(訳) 国書刊行会, pp.55-97.
- ヤクビンスキー, L.P. (印刷中). 田島充士・朝妻理恵(訳) 桑野隆(監訳) ダイアログの言葉について 田島充士 (編) バフチン・ダイアログ論を実践的に読み解く 福村出版



研究助成

- 本発表に関する研究は、独立行政法人日本学術振興会・科学研究費助成事業（若手研究（B））「大学生の共創的越境力を促進する教育方法・評価法の効果に関する実証的研究（課題番号：26780353 代表者：田島充士・平成26年採択）」の助成を受けた。